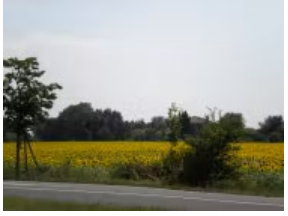
ぐるっと、ひと巡り （鈴木幸一氏の経営者ブログ）

2010/7/13 7:00|日本経済新聞 電子版

鈴木幸一（すずき・こういち）1946年9月生まれ。国内インターネットサービスの草分け。インターネットイニシアティブ（IIJ）を設立し、郵政省（現総務省）との激しいやりとりの末、93年にネット接続サービスを開始。後に続くネット企業に道をひらいた業界の重鎮。酒、タバコ、音楽と読書を愛し、毎春、東京・上野で音楽祭を開催、自宅は蔵書に埋もれる。

貧乏性というか、性懲りもなくというか、年がいもなくというか、いくらでも自嘲（じちょう）の言葉が浮かんでくるのだが、2週続けて、週末、パリ行きの深夜便に乗る。前週末は、ウィーンに出かけ、火曜日の朝には東京の勤務に戻ったのだが、今度は、アメリカへの出張があって、そのついでに、金曜日の深夜、イタリアに行き、その足でニューヨークの出張をこなそうというのである。ニューヨークに行くのに、イタリア経由にすることを、「ついでに」とは、無理があるけれど、ともあれ、ぐるっと、地球を一巡りすることにしたのである。

イタリア行きは、仕事ではなくて、親しくさせていただいている指揮者のリッカルド・ムーティさんの奥様が主宰をしている「ラヴェンナ音楽祭」を訪ねるためである。ちょうど、7月初めの土・日にムーティさんが、「BETULIA LIBERATA」という劇をもとに、同じころに、15歳のモーツァルトはオペラとして作曲し、46歳のヨンメッリはオラトリオとして作曲した2つの作品を、ふた晩、続けて演奏するということで、なんとか行きたかったのである。



ラヴェンナ郊外のひまわり畑（筆者撮影）

日本では、どちらの曲も演奏される機会がなく、私自身、初めて耳にしたのだが、ムーティさんの秀逸な演奏で、時差を忘れ、楽しむことができた。特に、2日目のニコラ・ヨンメッリ（1717-1774ナポリ生まれの作曲家）の作曲によるオラトリオは、西暦450年ごろに建てられたというビザンチン様式の教会、Basilica di Sant'Apollinare Nuovoでの演奏ということもあって、長く記憶に残るものとなった。イタリアの小都市ラヴェンナの市街地から車で10分ほど、夕暮れ時、ひまわり畑とブドウ畑の広がりに、忽然（こつぜん）と姿をみせる教会の内部に入ると、深みを帯びながら、あざやかな緑のモザイクが祭壇の天井を覆っている。このモザイクを見るために、多くの観光客が来るほど有名な教会だと、後から教えられる。

海辺の近さを感じさせる夏の夕凪（ゆうなぎ）の暑さが、演奏会場の教会の空気を静止させているようだ。2時間ほどの演奏を終えるころには、演奏者はもちろんのこと、正装している聴衆も汗が肌にまつわりつくほどになっている。最前列の席で、時差もあって眠るのではと、心配していた私も、それが杞憂（きゆう）に終わるほど、素晴らしい演奏だった。モーツァルトのオペラも、天才の証明のようなものだったのだが、15歳のモーツァルトには、ヨンメッリのようには、悲しみの深さや陰影を表現することは、できなかったようだ。音楽的には、15歳のモーツァルトの才能が、ヨンメッリを凌駕（りょうが）していたことは間違いないのだろうが、私には、教会でのオラトリオにひきつけられた。

「交渉を持ちかける相手である政府が江戸を留守にしている単純な事実によって、諸外国の代表者たちを、どんな不満があっても、どうにもならない、行動不能の状態に陥らせることは、確かにひとつの政策であり、その政策には、日本人の精神にかなうものが多くあるに違いない。敵対的な行動を起こす直接のきっかけを与えることなしに、その計画を挫（くじ）くことがもくろまれているだけに、とくにその感を深くする。」

あざやかな緑のモザイクが美しいBasilica di Sant'Apollinare教会。右は筆者

「われわれの主張や抗議をたえず無視することによって、われわれを限度に追い詰めた場合、かならず武力の行使に見舞われるという認識を日本人が持つ度合いに応じて、武力行使の必要は減少もするし、消滅もするのである。」

長々と引用した文章は、成田からパリ経由ボローニャ、ボローニャからフランクフルト経由ニューヨークという、長いフライトの間、ひたすら読み続けた萩原延壽氏の労作『遠い崖――アーネスト・サトウ日記抄』からの引用である。

下関海峡における長州藩による砲撃に対し、イギリス・アメリカ・フランス・オランダの連合艦隊を組織し、長州懲罰をリードしたイギリスのオールコック公使の言葉である。4カ国の連合艦隊による下関遠征による長州藩への攻撃は、直接的な武力行使によって、攘夷（じょうい）の流れを変えた外交戦略でもあった。

指揮者のリッカルド・ムーティさんの奥様と（右は筆者）

江戸幕府の終焉（しゅうえん）が、その統治形態の限界による内部崩壊といった面はあるものの、直接的には、軍事力の行使ないしは威嚇を背景にした諸外国の利益追求の圧力に始まったのは間違いない。開港要求をはじめ、海外勢のさまざまな要求に応えられる外交能力を江戸幕府が失って、内乱の危険をはらんだ時期、日本の公使であったオールコックの行動や言葉を読んでいるうち、自分の視線までも、当時の日本の統治者に立って歴史を見るのではなく、オールコックの立場から日本を見てしまうことに、不思議な気がする。なぜ、日本人である私が、東の果ての日本まで来て自らの利益追求を目的として、ひたすら要求を膨らませるイギリスの視点で、萩原氏が詳述する歴史の流れをみてしまうのだろう。どこかで、現状の日本の統治の姿、政治の状況に対するもどかしさに、思いが及んでしまうからに違いない。

ニューアーク空港に降りると、気温が40℃、車を待つ間、日陰のない道路わきで10分程、日差しをまともに浴びていると、暑さにすべての感覚が消えるようで、それは心地よいほどの麻痺（まひ）感が襲う。

「かくも長きデフレを続けている国の政策の過ちは」

その夜、日本でも教鞭（きょうべん）をとったことがある著名なエコノミストと食事をする。その是非については議論があるけれど、リーマンショックに端を発した金融危機に対するアメリカ政府の対応は、果断で早かった。巨額という表現でも足りないほどの公的資金の投入等々、危機における日本の政策対応とは、時間軸が異なる。

「1990年ごろ、日本も銀行に対していち早く公的資金を投入すべきだったですね。当時、私は日本に居まして、宮沢さんは、そういう方針を持っていたようですが、当の銀行が乗り気ではなかったようですね。あの時、敢然と公的資金の投入をするといった決断というか、政策遂行者としての実行力があれば、その後の日本はずいぶんと違ったと思いますね」

暑かったニューヨーク（筆者撮影）

「今週末は、日本の参議院選挙ですよ」

と、選挙に話を向けようとしたけれど、その話には乗らず、EUやアメリカ経済の話に戻って、示唆されることが多かった。それにしても、知日家ですら、今の日本の政治については、語るに値しないということなのだろうか。

鈴木幸一　IIJ社長のブログでは、読者の皆様からのご意見、ご感想を募集しております。
こちらの投稿フォームからご意見をお寄せください。

経営者ブログ トップ

ビジネスリーダー トップに戻る

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.